

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月24日現在

機関番号：10102

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22730499

研究課題名（和文） 学習の動機づけにおける課題価値とコスト認知の葛藤解決支援に関する研究

研究課題名（英文） A psychological research about the conflict and integration between subjective task-values and perceived costs in academic motivation.

研究代表者

伊田 勝憲（IDA KATSUNORI）

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：20399033

研究成果の概要（和文）：学習内容に価値を見出すことと、学習に取り組むことで失われるもの（コスト）との葛藤に焦点を当て、学習しない理由についての文献研究および大学生を対象とした質問紙調査により価値とコストの関係を検討した。コストとして、学習に取り組むことで自分の能力の限界を自覚せざるを得ないことへの不安と、学習に取り組んでも意味がないかマイナスだと感じてしまうことの2側面が抽出され、特に前者は学習を継続する中で価値との共存が可能であることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is reviewing about study-avoidance motive and investigating the relationship between subjective task-values and perceived task-costs at undergraduates. It is found that the concept of cost in academic learning consists of the anxiety of knowing limitation of learners' own ability and the devaluation of task and the former could coexist with positive values of the task.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：課題価値，コスト，動機づけ，青年期

1. 研究開始当初の背景

(1) 価値観の多様化や将来の不透明さ等によって、学校教育段階で「学ぶことの意味・価値」を実感することが難しくなると同時に、苦痛の回避（無痛化）や努力の忌避という時代の流れの中で「学習の回避」という傾向が

意欲低下に拍車をかけている。近年は、「学習する理由」の乏しさのみならず、「学習しない理由」が積極的に存在するという見方が提起されている。小方（2004）は、努力を最小限にしたり、困難な課題を回避する傾向を指す「学習回避志向性」の概念に着目し、主

に 1980 年代以降の国外における目標志向性の研究を展望している。また、倉住 (2007) による「学習回避動機」の自由記述内容の分析が国内の研究例として挙げられるが、国内外を問わず実証的研究は少なく、他の理論との関係も未整理である。

(2) 期待-価値理論から派生した Eccles ら (1995) の課題価値の枠組みでは、学習することの価値として、楽しさ・おもしろさ (興味価値)、重要性・自己成長 (獲得価値)、将来との関係・有用性 (利用価値) とともに、課題の困難度や必要な努力量を指す「コスト」が負の価値として位置づけられている。提唱者も含めてその後の研究ではコスト概念があまり取り上げられていなかったが、最近、大学での体育の授業への動機づけにおける健康追求の価値とそれに伴うコストとの葛藤を検討している Chen ら (2009) の研究が新しい動向として注目される。

(3) 動機づけ研究以外の領域では、谷 (2000) が Erikson, E. H. による心理・社会的発達の視点を援用し、大学生の学業遅延傾向を児童期 (第IV段階) の課題である勤勉性の獲得の失敗に由来する「選択の回避」として論じているものの、学習への動機づけとパーソナリティ発達を関連づける研究は全体として少ないのが現状である。

(4) 青年期における自律的な学習動機づけ像を検討するために、伊田 (2003) は、Eccles らの課題価値概念を精緻化し、将来の職業実践にとっての有用性を指す「実践的利用価値」がパーソナリティ発達 (自我同一性、自己充實的達成動機等) と関連の深いことを見出した。ただし、コスト概念の精緻化には至っていない。

(5) 伊田 (2008) は、速水 (2006) の提唱する仮想的有能感 (他者軽視) に関する研究の中で、仮想的有能感の強い青年の特徴として、学びによる自己成長 (私的獲得価値) の追求が弱いこと、そして児童期以前の課題 (勤勉性等) の積み残しを示唆する調査結果を得た。このことから、劣等感への直面回避あるいは自己変容 (自分くずしを経た上での自分づくり) への抵抗として学習回避志向性を解釈できる可能性がある。

(6) 上記 (4) と (5) は出自の異なる研究テーマであったが、青年期由来の課題価値追求と、児童期以前に由来するコスト受容という形で、パーソナリティ発達 (心理・社会的発達) と学習への動機づけ (課題価値理論) の関係を統合的に描けると考えるに至った。

2. 研究の目的

(1) Erikson の第IV段階・児童期 (勤勉性対 劣等感) および第V段階・青年期 (自我同一性の確立 対 自我同一性の拡散) の心

理社会的危機に関する論考に基づき、第IV段階はコスト受容 (または回避)、第V段階は課題価値の維持・高揚 (または否定) に関係しているというメカニズムを想定し、特に勤勉性の獲得失敗による仮想的有能感の発生とコスト回避・課題価値否定の悪循環を実証するための数量的データを得る。

(2) 課題価値 (学ぶ理由) とコスト (学ばない理由) の両面に注目し、それぞれが心理・社会的発達の異なる段階に由来するというモデルを構築した上で、学習者が価値実現に向けてコストを受容する動機づけ過程およびその条件・支援策についての段階的なモデル化を行う。

(3) マクロな視点では、統合的な動機づけ理論構築が期待できる。学習意欲低下の発生メカニズムが、心理社会的発達における児童期以前の課題の積み残しという切り口によって説明されると同時に、仮想的有能感の観点から、他者軽視や対人関係といったパーソナリティ発達の問題と学習意欲低下を関連づけて理解することができる。

(4) よりミクロな視点では、倉住 (2008) が指摘する周囲からの否定的評価の懸念による学習回避 (周りとは仲良くするためには勉強しない方がいい) は、これまでの仮想的有能感の研究で明らかになりつつある対人関係上の問題をはらんでいると想定され、パーソナリティ発達との関係が明らかになれば、関係性をポジティブに捉えてきた動機づけ研究の流れに一石を投じることになる。

3. 研究の方法

(1) 課題価値理論に基づく実証的研究の中でコスト概念がどのように扱われてきたのかについて文献展望を行うとともに、価値やコストを扱う人文・社会科学 (特に経済学) にも展望範囲を拡大し、心理学的な動機づけ研究に適用可能なコスト概念を整理した。その上で、大学生を対象として質問紙法による調査を実施し、「課題コスト尺度」の開発を行うことにした。

(2) 尺度の開発にあたって着目する観点は以下の2つである。1つは、Maslow (1968) の「知ることのおそれ」である。本来、知ることを欲することが自己実現につながると考えられるが、真実を知ることによって自尊心が傷つけられるような場合や新たな責任が発生することで義務感が生じるような場合など、成長それ自体を避けようとする側面もあることが指摘されている。Maslow によると、知ろうとする欲求には「不安解消のための知識と成長のための知識」の獲得という両方があると考えられるが、知識の獲得が不安を招く場合には学習が回避されると考えられる。

(3) もう1つは、Kernberg (1976) によって境界性人格障害との関連から注目されている原始的防衛機制である「脱価値化」が挙げられる。社会学の視点からは、上野 (2005) において述べられているアイデンティティ管理の発想やその中に登場する「補償努力」や「価値剥奪」も概念的に重なる。価値剥奪は、自らを変えないまま、より相対的に弱者である社会的カテゴリーの人々の価値を奪うことによって自らの社会的アイデンティティを相対的に高める「差別」化戦略である。また、速水 (2006) の提唱する仮想的有能感 (他者軽視) の概念も同様の文脈で解釈しうる。

(4) このような観点から「課題コスト尺度」を開発し、学習内容に見出している価値を指す「課題価値」との関連を検討することにより、価値づけと共存可能なコストの様相を探るとともに、葛藤解決に至る過程についての段階的なモデルを構築することにした。

4. 研究成果

(1) 大学生を対象とした調査を実施し、「課題コスト尺度」12項目を因子分析した結果、2因子が抽出された。その後、プロマックス回転を行い、第1因子を「脱価値化」、第2因子を「知ることのおそれ」と名付け、それぞれ8項目と4項目からなる内的整合性 (信頼性) の高い下位尺度を構成した。下位尺度間相関は中程度であった。

すなわち、課題に取り組んでも意味や価値がないと感じる側面と、課題に取り組むことで自己の能力の限界を感じる側面が心理的なコストとして取り出された。

(2) 学習意欲を捉える課題価値測定尺度 (伊田, 2003) との関連を検討した結果、脱価値化については、制度的利用価値 (進学・就職時の有用性)、興味価値 (楽しさ・おもしろさ)、実践的利用価値 (就職後の有用性) との間に有意な負の相関が見られた。また、知ることのおそれについては、私的獲得価値 (自己の成長) との間に弱い正の相関が認められた。

脱価値化については、床効果が顕著であり、各項目内容の再検討が必要であるが、課題価値との負の相関が見られ、学習を回避する程度の強いケースを捉えていると考えられる。知ることのおそれについては、課題価値の低下を招かず、自己の成長に伴う適応的な不安である可能性が示唆され、受容可能な心理的コストと考えられる。

(3) 先行研究の展望および以上の尺度開発の成果を踏まえ、課題価値 (学ぶ理由) とコスト (学ばない理由) の両面に注目し、今後の研究の方向性についてまとめた。

まず、「課題コスト尺度」開発の成果を踏

まえて、学習回避動機としての課題コストを概念化した。従来の成功恐怖や成功回避動機の研究において指摘されているアイデンティティと学業成績の関係についての知見を敷衍し、生き方や価値観および将来目標などアイデンティティの具体的な内容と現在の学習領域の内容とが葛藤する場合、そのアイデンティティが明確であるほど価値づけが低下すると考え、学業的成功が自分のアイデンティティを壊すと認知されている場合に積極的学習回避動機が発生し、課題コストが大きくなるという図式で理論的なまとめが行われた。

(4) また、パーソナリティ発達から見た課題コスト概念の特徴としては、心理社会的発達の観点から、児童期 (第IV段階) の心理社会的危機に由来する「労働麻痺」「勤勉性の拡散」および「選択の回避」という側面、知識の獲得が不安を招く場合を指す「知ることのおそれ」、そして原始的防衛機制として「補償努力」「価値剥奪」「脱価値化」が重なると考えられ、大学生を対象とした調査結果から、「知ることのおそれ」については成長への志向性に伴う適応的な不安としての解釈可能性も示された。

(5) 課題価値と課題コストの葛藤解決に向けては、自らの学習動機づけがどのような葛藤解決段階にあるのかを図式化したセルフチェック用のモデルを開発した。学習場面における瞬間的な興味や楽しさを指す感情的側面と、持続的な興味や関心および価値の内面化を指す認知的側面の2軸から、紆余曲折を経て葛藤に折り合いをつけるプロセスを視覚化することに重点を置いた。今後、自己決定理論との関係についてさらなる実証的研究として展開することが課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

1. 伊田勝憲 (2012). 動機づけ研究における「価値」の問題—価値の「内容」「内面化」そして「統合的調整」をめぐって— 自己心理学, 5, 22-38. (査読有)
2. 伊田勝憲・乾真希子 (2012) 学習回避動機としての「課題コスト」概念化の試み—課題価値理論および関連する心理学的知見をもとに— 釧路論集 (北海道教育大学釧路校研究紀要), 44, 41-48. (査読無)
3. 伊田勝憲 (2011). リアリティショックへの対処と学習への動機づけの関係を考える—半澤論文へのコメント— 青年心理学研究, 23, 85-89. (査読有)

4. 伊田勝憲・乾真希子 (2011). 学習意欲研究における自律性の位置づけ—内発的動機づけの批判的検討を通して— 釧路論集(北海道教育大学釧路校研究紀要), 43, 7-14. (査読無)

- (2)研究分担者
なし
- (3)連携研究者
なし

[学会発表] (計4件)

1. 伊田勝憲 大学生における仮想的有能感と心理社会的発達に関連—多次元自我同一性尺度 (ME I S) を用いて— 日本パーソナリティ心理学会第21回大会, 2012年10月7日, 島根県民会館
2. 伊田勝憲 課題コスト尺度作成の試み—学習を回避する負の価値づけと課題価値との関連— 日本パーソナリティ心理学会第20回大会, 2011年9月4日, 京都光華女子大学
3. 伊田勝憲 動機づけ研究における“自律”—課題価値研究・アイデンティティ研究の視点から— 中谷素之・速水敏彦 (企画) 自主企画「動機づけ理論の再構築に向けて—現実からみた人の動機づけ研究の課題—」日本教育心理学会第53回総会, 2011年7月24日, 北海道立道民活動センター
4. 伊田勝憲 学習意欲研究における自律性の位置づけ—内発的動機づけの批判的検討を通して— 北海道臨床教育学会第1回大会 (自由研究発表・一般研究部門), 2011年7月18日, 北海道教育大学札幌校

[図書] (計3件)

1. 伊田勝憲 (2012). 学習意欲と職業 速水敏彦 (監修) コンピテンス—個人の発達とよりよい社会形成のために— 第3章2 ナカニシヤ出版 pp.163-171.
2. 伊田勝憲 (2012). 仮想的有能感形成の背景要因—発達との関連— 速水敏彦 (編著) 仮想的有能感の心理学—他人を見下す若者を検証する— 3章1節 北大路書房 pp.91-101.
3. 伊田勝憲 (2011). 自己物語と動機づけ 榎本博明 (編) 自己心理学の最先端—自己の構造と機能を科学する— 第3部人生を意味づける自己 1 あいり出版 pp.165-175.

6. 研究組織

(1)研究代表者

伊田 勝憲 (IDA KATSUNORI)
北海道教育大学・教育学部・准教授
研究者番号: 20399033